公立大学法人島根県立大学広報誌 ―オロリン

RORIN

島根県立大学
The University of Shimane

Vol. 05
2016.1

松江キャンパス 大学祭「飛鳥祭」と同窓会「松苑会」に集った学生、卒業生たち

P01 | 学長インタビュー | 本田雄一学長が語る「地域」「国際」
P13-14 | 新コーナー:Glocal | 多分野で活躍するOB・OG
P11-12 | 学生活動紹介「doing」 | キャンパスから地域へ!

P02-04 | 特集 | 「国際」「地域」キーワードに人づくり

公立大学法人島根県立大学広報誌 RORIN 2016年1月31日発行 編集・発行／島根県立大学 企画調整室 〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2 TEL.0855-24-2201 FAX.0855-24-2208 http://www.u-shimane.ac.jp/

島根県立大学 出雲キャンパス しまね看護交流センター

サテライトキャンパスオープン

～地域と大学結ぶ 街なか拠点に～

平成27年10月、出雲キャンパスでは、
JR出雲市駅近くの出雲市中心市街地に、
「サテライトキャンパス」を開設しました。
サテライトキャンパスの開設は、浜田、松江両キャンパスを含めて初めて。
地域のニーズに応える多様な市民公開講座・セミナーを開催し、
市民の生涯学習の支援を行うと共に、
大学と市民の交流の場とし、本学の教育研究、
社会貢献を推進するための新たな活動拠点となります。
市民の皆さまのご利用をお待ちしております。

［いきかたカフェ］
生と死を考えるカフェ形式のつどい
毎月第3土曜日
14:00～16:00開催

出雲市駅北町1夢屋テナントビルF棟2階（モスバーガー出雲駅北店様南側）
講義形式で使用の場合、収容人数20名～30名まで。駐車スペースはありません。
周辺の有料駐車場をご利用ください。

［お問い合わせ］
島根県立大学 出雲キャンパス
しまね看護交流センター
TEL.0853-20-0220 FAX.0853-20-0227
e-mail.kango@izm.u-shimane.ac.jp

文部科学省 地(知)の拠点 平成27年度 島根県立大学「地(知)の拠点整備事業」成果報告会

第3回 全域フォーラム 入場無料

2016年2月16日(火)9:30～ ［会場］浜田キャンパス 講義・研究棟1階 大講義室1ほか

ぜひご来場ください!

- 浜田市・益田市と島根県立大学の共同研究報告会
- 基調講演（濱崎一志 滋賀県立大学 理事・副学長 地域共生センター長）
- 「しまね地域共育・共創研究助成金」成果報告会、学生研究発表会

お問い合わせ先 島根県立大学 地域連携課 〒697-0016 浜田市野原町2433-2 TEL.0855-24-2396

島根県立大学の取り組みや最新情報は、ホームページでも配信しています。ぜひご覧ください。

島根県立大学 マスコットキャラクター オロリン

島根県立大学 検索

http://www.u-shimane.ac.jp/

本学はキャンパス内全エリア禁煙に取り組んでいます。

「国際」「地域」キーワードに人づくり

巻頭特集では、大学憲章に掲げる「国際」「地域」をキーワードに、浜田、出雲、松江3キャンパスの特色ある教育の取り組みをピックアップ。本田雄一学長に、大学が目指す教育の理念、目標などをうかがいました。

特集「3キャンパスの特徴的な教育の取り組み」

本田雄一学長

2010年4月に制定した大学憲章は「北東アジアをはじめとする国際社会の発展に寄与する大学」を、また「地域のニーズに応え、地域と協働し、地域に信頼される大学」を実現するとうたっています。

今や経済のグローバル化の進展、インターネットをはじめとする情報通信技術の急速な発達により、私たちは世界の動きから隔絶されて存在することは不可能です。大学生活を通じて、国際的視点から地域を考え、実践できる人間として成長してほしいと願っています。

また、本学は、地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を文部科学省が支援する「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、今年で3年目です。事業の狙いは大学の理念と完全に一致しており、過疎・高齢化やそれに伴う人口減少問題など、島根県が直面しているさまざまな課題の解決に向け、3キャンパスの専門性を生かし、自治体などとも密接に連携しながら取り組んでいます。その取り組みの柱のひとつが「しまね地域マイスター認定制度」です。フィールド活動を重視し、地域の再生や活性化に貢献する人材を育成していく考えです。

浜田キャンパス　異文化理解と海外企業研修

異文化理解研修は各キャンパスで導入していますが、中心となるのは浜田キャンパス。キャリア教育の一環で行う海外企業研修も含め、語学研修だけでなく、文化、生活習慣の違いを理解し、尊重し合える関係性や包容力を養ってほしいと願っています。また、アグレッシブな海外の学生たちと直に交流することで、現在の自分に何が足りないか見つめなおす機会となり、学習へのモチベーションを高める効果も生まれています。

出雲キャンパス　タウンミーティングを重視

人口が集中する県東部と異なり、県西部の中山間地域や離島地域では医療設備も人材も不足しています。学生には、いかに必要とされているか、自覚、理解した上で地域医療に関わってほしい。そのためフィールド学習「島根の地域医療」では医療や介護現場の実習だけでなく、タウンミーティングを重視しています。地域を教育に生かし、人材を輩出し、課題解決の研究に努める。地域との協働が不可欠なカリキュラムです。

松江キャンパス　取得資格の高度化を図る

保育学科、健康栄養学科は取得資格の高度化を図ります。総合文化学科は「観光」に関連する教育・研究機能を充実させます。観光は少子高齢化時代の経済活性化の柱、県も「地方創生の切り札」と位置付ける主要産業。今後必要とされる人材育成など地域貢献のための教育、研究機能を強める方針です。

本学では3キャンパスの専門性を生かした教育と実践を推し進め、社会に求められる人材の育成を目指します。学生にはぜひ「地（知）の拠点」の具現に向かってチャレンジしてほしいと思います。

浜田 キャンパスの取り組み

海外で「異文化理解」「企業」研修

国際短期大学を前身とする浜田キャンパスには、国際交流の素地があります。なかでも特徴的なのが、現地での生の体験を重視した「異文化理解研修」「海外企業研修」の取り組みです。

カセサート大学（タイ）でのディスカッション

米国など5大学で異文化理解研修

2003年度から15年度の間、中国、韓国などの留学生受け入れ数520人に対し、海外への留学者数は122人。1学年220人規模の本学では多人数を送り出すのが困難な面もあり、力を入れているのが短期の「異文化理解研修」です。

研修地は交流協定を締結している海外24の大学・機関のうち、ミドルブリー国際大学（米国）、北京外国語大学（中国）、蔚山（ウルサン）大学校（韓国）、海洋国立大学（ロシア）、ハワイ大学（米国）の5大学。夏、春の長期休暇を利用して約1カ月間滞在し、語学学習や社会・文化学習、現地学生との交流などを体験。10年度からの5年間で計436人が参加しました。

日本文化体験（神楽面絵付け）

海外企業研修参加者100人突破

一方、「海外企業研修」は将来のキャリア形成に必要な知識、姿勢を育む「キャリア教育」の一環。国際感覚を養うとともに就業意欲を高める目的で2011年度に導入し、これまでに延べ118人がインド、韓国、タイの3カ国で研修。世界的IT企業インフォシス（インド）、サムスン（韓国）などのグローバル企業や、タイでは山陰合同銀行、シマネ益田電子など県内の海外進出企業や大学を訪問しています。

今夏は「インドのシリコンバレー」と呼ばれるベンガルールに10人が約1週間滞在。ITや電気自動車製造などの企業や、本学が交流協定を結ぶアチャリャ経営大学を訪問しました。2年生の坂本祐平さんは「カルチャーショックを受けた。公道に穴が空いていたが、大企業の敷地内は1つの街のように整備され、自動車工場はきれいでハイテク。インドに抱いていたイメージが覆された」と感想を語りました。同、藤岡賢司さんも「インドの経済成長を実感。海外と関わって働くことがイメージできた。語学力の大切さも身に染みた」と話します。研修の参加者が体験を語る「GET SET MEETING」を今年度から実施し、こちらも参加を検討する学生らに好評を博しています。

異文化交流を機に、交流協定を締結している安徽（あんき）財経大学（中国）で本学の卒業生が今春から日本語教師として勤務。さらに増員要請があるなど、海外での就業につながる例も出てきています。一方、海外からの留学生のほかに年間50人前後の交流訪問も受け入れており、無津呂美保国際交流課長は「学生が国際交流を通して地域を学び直し、理解を深める機会にもなる。地域での交流活動にも広がっています」と多方面の効果を期待しています。

浜田キャンパスのカフェテリアで催された「GET SET MEETING」

出雲 キャンパスの取り組み

「中山間地域」「島しょ地域」「海岸地域」フィールド学習

島根県下の中山間地域、島しょ地域、海岸地域などで保健・医療・福祉のフィールド学習を行う出雲キャンパスの「島根の地域医療」。4年制化を機に、看護学部看護学科2年生前期の必修科目として2013年度から導入されました。

幅広い医療・看護ニーズに対応 県西部、離島の看護師不足解消

文字通り、「島根の地域医療」への理解と関心を深めるカリキュラム。全国に先駆けて少子高齢化が進む島根県。この傾向がより一層顕著な中山間地域、島しょ地域、海岸地域では、医師、看護師の不足をはじめ、無医地区が多く、地域ごとに異なる医療課題を抱えています。

院内オリエンテーション（川本町・加藤病院）

子育て支援センターでの活動（雲南市）

目的のひとつは、本格的専門教育が始まる前の2年生の段階で「保健・医療・福祉」をトータルに学ぶこと。地域で高齢者を支える地域包括ケアなど幅広い医療・看護ニーズに対応する人材を育成します。郷土愛を高めていく狙いもあり、地元の町長や病院長にも参加してもらい、医療関係だけでなく、生活環境や交通などさまざまな地域の実情も学びます。

もうひとつの目的は県西部の看護師不足解消。短大時代、看護実習場所の多くは大きな病院が集中する県東部で、卒業後の進路も東部の医療機関が大半。県西部や島しょ地域の病院を知らないことが主因ともされ、人材輩出の偏り是正は県立大学としての課題でした。

保健・医療・福祉の現場体験

実習地は隠岐の島町、津和野町、雲南市など8市町。事前の講義、オリエンテーションを経て、夏休みに各班2～3泊のフィールド学習を行います。学習プログラムは各地域の課題に応じ、学生が事前に学びたいテーマを提示。医療機関の実習だけでなく、介護や保健活動の現場を経験したり、漁港での産業体験など内容は多彩です。

学生が提出したレポートには「医師不足に負けず、協力し合い、地域が1つの病院のように思えた」「医療機関が充実していない分、人のつながりが緊密」「中山間地域の医療をより充実したものにするためには若い力が必要」「求められるニーズは地域ごとに異なることに気付いた」など幅広い感想が記されました。

クイズをとおして高齢者と交流する学生たち（出雲市北浜地区の高齢者サロン）

指導する齋藤茂子特任教授（公衆衛生看護学）は「看護師、保健師、助産師の看護職は人々の生命、生活、人生に寄り添う仕事。健康課題・問題が生活に関連しているのを理解することが必要。専門職として、地域力アップに役立つ人材になってほしい」と期待をかけています。

松江 キャンパスの取り組み

ゼミ研究テーマに「観光」「過疎地域」

短期大学部の松江キャンパスでは、総合文化学科2年生のゼミ活動で、地域の「課題」「素材」を積極的に取り上げています。

学生の視点で「松江観光」PR

「松江の観光」を研究テーマとする総合文化学科の観光文化ゼミ。2013年度以降、カラコロ工房の観光スポット「ピンクの幸運のポスト」PRなど、学生の視点で松江の魅力発信を続けています。

千葉、岡山県から訪れた観光客に松江城を案内する（左から）佐々木麻衣さん、菅家みくさん、柳楽紫さん

地域のお祭りに参加（出雲市多伎町奥田儀）

松江城天守が国宝指定された今年は、ゼミ生10人が卒業研究の一環で城の歴史やガイドの心得を学ぶ座学や実地研修を受講しました。このうち佐々木麻衣さん、柳楽紫さん、菅家みくさんの3人が10月、ボランティアガイドとしてデビュー。卒業後は玉造温泉の旅館に就職する菅家さんは「学んだことを生かし、大好きな松江を発信したい」と抱負を語りました。

指導する工藤泰子准教授（近代観光史）は「松江城天守の国宝指定で観光客の増加が見込まれ、島根県、松江市などが目指す着地型観光における地元ガイドの重要性も高まっています。実地に学んだ学生たちの今後の行動力に期待しています」と話しています。

民俗文化調査、資源活用提案も

小泉凡教授（民俗学、文化資源学）が指導する民俗・文化資源ゼミでは2012年度から、卒業プロジェクトとして出雲市内の過疎、高齢化地域でのフィールド学習を続けています。

同市地域づくりアドバイザー吾郷秀雄さんが「学生の視点で地域を調査研究し、活性化策を提案してほしい」と依頼。市内大社町鵜鷺（うさぎ）、佐田町朝原、同町毛津、多伎町頭名（ずな）の各地区で調査を行いました。事前学習を経て、学生が地域に入るのは5月の大型連休、夏休み中の合宿、12月の補足調査と概ね3回。夏合宿ではお寺や民家に宿泊しながら、食文化、生産・生業、人生儀礼、年中行事、信仰、民話などの生活伝承について聞き取り調査。発掘した〝地域資源〟は観光や経済活動に生かす提案として報告書にまとめ、調査地区にも配布しています。

学生自身が実際に取り組んだケースもあり、佐田町朝原地区ではおいしい野菜と特産なたね油に感動し、朝獲れ野菜を都市部にアピールすることを提案。松江市内のお寺で開かれた食イベントに出店、天ぷらにして販売しました。また、大社町鵜鷺（うさぎ）の調査後も地域住民と交流を続けた学生が浜田キャンパスに編入学して研究を継続した例も。小泉教授は「高齢者など幅広い年齢層の人たちと触れ合うことも学生には貴重な体験。交流が継続する展開が理想」と、調査活動を契機とした交流の発展に期待しました。

過疎高齢化地区での聞き取り調査（出雲市佐田町毛津）

地域とつながる 世界へひろがる

浜田キャンパス

HAMADA Campus http://hamada.u-shimane.ac.jp/

大学内の食堂で毎月実施される「朝食キャンペーン」

学生を生活面からサポート

朝食キャンペーンや多様なニーズに対応する相談窓口、安全性に配慮した学生寮―。浜田キャンパスでは、学生の健康管理や生活リズムの維持など、学生生活のサポート体制が充実しています。

学生に好評の朝食キャンペーン

学生食堂では平成22年度より毎日朝食を提供しています。朝食キャンペーンは、学生に朝食をとる習慣をつけてもらおうと昨年度からスタートしました。期間は、毎月、「食育の日」の19日を含む3週目の1週間。通常300円の朝食メニューを200円に値引きして提供。値引きの差額は学生の保護者でつくる浜田キャンパス後援会が負担しています。また、2月と7月の学期末試験期間中は朝の営業時間を15分早めて午前8時に開店。「普段は朝食をとらないが、試験の時は食べたいので助かる」などと好評。とくにこの試験期間は利用者数が増加するという。矢冨孔寅教務学生課長は「一人暮らしの学生が多く、食堂は寮の学生も利用する。適切な食習慣の確立につなげていきたい」と話します。

朝食キャンペーンで提供される定食メニュー1例

安全安心の学生寮

5年前から、学生寮（定員152人）を1年生限定に見直しました。しっかりしたセキュリティや孤独にならない生活環境など、「いきなり一人暮らしは心配」という学生や、防犯面の安心をより求める保護者のニーズに応えています。

多様なニーズに対応する相談窓口

一方、悩みを抱える学生たちの多様なニーズに対応し、気軽に相談できる「学生サポート室」ほか3カ所の学生相談室を設けています。学習、健康、精神保健、ハラスメント、学生生活、人間関係などあらゆる分野に対応しています。矢冨教務学生課長は「相談件数は増加傾向にあり、さらにサポート体制を充実させる必要を感じている」と話します。

セキュリティー設備を拡充した学生寮

Research Report 研究レポート

マニング・クレイグ講師

英語コミュニケーション力を育む 少人数グループトーク

ゼミの学生とテーマについて話すマニング講師

母校米国コロラド大学では化学を専攻していたマニング・クレイグ講師。英語教育に興味を持ったきっかけは、友人のフランス人学生に英語を教えた経験でした。学生指導で重視するのは、英語をツールとして使いこなす「コミュニケーション力」です。

少人数グループトーク 英字新聞活用、多読も

担当する1、2年生の英語コミュニケーション科目では、一方的な指導ではなく、学生が英語で意見を語り合いながら学ぶ手法を取り入れ、成果を上げています。

学生は4人ほどの少人数グループで、設定テーマに沿って英語でグループトーク。時事ニュースやファッション、4コマ漫画など題材は多様で「英語で質問し合い、教え合うことで学習効果が上がる。同年代の教え合いは競争心もあり、特に効果が高い」と評します。

さらに、英字新聞を活用し、学生自身が関心のある記事を選び、要約し、自分の考えや感想を英語で記す課題も設定。たくさんの英語の本を読む「多読」も推奨し、学生は同様に英語で要約、感想を一冊のノートにまとめます。「英単語を覚えるだけでなく、複数の意味が分かるようになる。そして考えを記す、ここが最も重要。理解だけでなく、伝えることがコミュニケーションの基本」と説きます。

中学・高校と英語が苦手だったという男子学生（2年）は今はスムーズに英会話できるほど上達。「多読で好きなフレーズを見つけると、次のコミュニケーションの授業で試してみる。日本語より打ち解けやすく、大学に慣れない1年の時、コミュニケーションの授業がきっかけでたくさん友人ができた。今は英語が楽しい」と言います。

また学習成果を試す機会にと、カリフォルニア州ミドルブリー国際大学で毎年夏休みの約1カ月間、2年生が英語を学ぶ異文化理解研修も担当。「本場の英語に接することができる」と、学生に人気です。

カリフォルニア州ミドルブリー国際大学での異文化理解研修に参加した学生たち

英語ゼミ指導は「プレゼン」「論文」そして「アクション」

一方、英語で論文をまとめるゼミ（2～4年生）も担当。2年生ゼミを担当する今年度は「バスの有効活用」「ベトナム」など5テーマを設定。ベトナム班は井戸や食糧などの現地支援を計画し、チャリティーバザー、企業への資金提供依頼などを実践中。共同で支援する米イースト・カロライナ大学と1月にテレビ会議を経て、3月に現地訪問予定。「ゼミ課題はプレゼンテーション、論文、アクションリサーチ（社会還元、現状改善を目的とする実践的研究）。英語はツール。目的意識を持って使うことで、どんどん使えるようになる」と、活動成果に期待をかけています。

総合政策学部（浜田キャンパス）
マニング・クレイグ 講師
専門分野　英語学習法
英語コミュニケーション、異文化コミュニケーション実践英語、上級英語Ⅱ（ディスカッションとディベート）などの科目を担当。学生が英語を使いこなすコミュニケーション力育成に力を入れている。

「ひと」を支え「地域」を支える

出雲キャンパス

IZUMO Campus　http://izumo.u-shimane.ac.jp/

入学説明会と併せて開かれた大学院開設プレフォーラム（9月、出雲市内）

2016年4月、大学院新設「研究と実践」の人材育成へ

出雲キャンパスに2016年4月、大学院（看護学研究科、定員1学年5人）が新設されます。「島根の地域医療を担い、けん引する優れた看護の人材育成」を目指し、今春文部科学省に修士課程設置を申請、8月31日付で認可を受けました。2012年、看護学部開設に続き、4年後の大学院開設を目指してきました。

同研究科では、過疎高齢化が進む島根の医療・看護の課題を探り、課題解決の実践まで継続して取り組む狙いです。

具体的には、①がん患者、家族のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）向上を目指す「がん看護学」②ストレス社会における精神健康問題に対応する「精神看護学」③生活機能維持など健康寿命伸張を目指す「高齢者リハビリテーション看護学」④地域特性を踏まえた疾病予防とヘルスプロモーションが柱の「地域保健学」――の4領域。医療機関、行政などの協力も得ながら研究的に課題解決を図ります。

社会人にも広く門戸を開く

中でも中山間、離島地域の課題対応を重視。学部で必修化しているフィールド学習について、研究科でも基盤、専門科目の計2科目で必修化。学部と同じフィールド（津和野町、川本町、隠岐3町など8市町）とすることで、継続的な実践効果を期待します。

一方、課題研究を志す社会人に門戸を開き、履修期間は最大4年（基本2年）、平日夜間・土曜の開講、集中講義を組み入れるなど働きながら履修しやすいよう配慮。大学院準備委員長の石橋照子教授は「看護学は実践の学問。働く中で課題が見えてくるケースは多い」と指摘。「地域医療で求められるのはスペシャリストの専門看護師よりも、専門知識を持ちつつ、保健・医療・福祉をトータルに見られる人材。高い志を持つ人たちにぜひチャレンジしてほしい」と話しています。

がん看護学	キュアとケアを統合し、がん患者とその家族のQOL向上を目指した卓出したがん看護実践能力・適切な倫理的判断力・研究的視点を備え、がん患者とその家族を取り巻く保健・医療・福祉環境の変化に創造的に対応できることをめざします。
精神看護学	精神の健康問題をもつ人々の療養生活を支援する介入研究を通して、エビデンスをもって看護実践やケア環境の質の改善に向けて取り組むことをめざします。
高齢者リハビリテーション看護学	倫理観と研究的視点を基盤として高齢者自身とその周囲の環境に働きかけ、生活機能の維持・向上と社会参加を促進する看護実践に取り組むとともに、高齢者や家族そして多職種とのコーディネート力を修得することをめざします。
地域保健学	住民の健康増進および疾病予防に対する質の高い保健活動を保証していくために、地域特性を踏まえ、課題解決に向けてエビデンスの活用と現行の法律・制度・政策が健康に与える影響を分析し、解決策を提案できることをめざします。

研究分野の概要

Research Report
研究レポート

加藤 真紀講師
ライフワークは「高齢者と家族の終末期における意思決定と支援」

IZUMO Campus

高齢化率全国3位（2014年）、75歳以上の後期高齢者も増加傾向にある島根県。独居や高齢夫婦だけの世帯も増え続けています。加藤真紀講師がライフワークとする研究テーマは「高齢者と家族の終末期における意思決定と支援」。家族の終末期に向き合った経験が大きく関わっているといいます。

施設入所している高齢者との対話の時間を大切にしている、と言う加藤講師（写真左）＝特別養護老人ホームやまゆり苑（出雲市）

家族の終末期に寄り添った経験、フィールド研究の動機に

「10年程前、脳血管障害で倒れた義祖母は麻痺で体が動かず、話すこともできませんでした」。口から食事がとれなくなり、腹部の外から胃に管を通す胃ろうという処置で栄養補給する療養生活を送り、3年後に亡くなったという。

「医療技術の発達に伴い、〝救える命〟は確実に増えている。しかし、意思表示が困難な状態の中で、胃ろうなどの人工栄養で延命することを果たして本人は望むのか。終末期のあり方について世論が活発化した時期でした」

様々な議論に共通しているのは「本人の意思が重要」との認識。厚生労働省の終末期医療の決定プロセスに関するガイドラインでも「患者本人による決定が基本」と示しています。ただ、自身の経験から「本人はもちろん、意思決定が困難になった患者に代わって意思決定する家族も考えが揺れ動く。代理意思決定の妥当性や、看護職としてどう支えるか、考察したいと考えました」と振り返ります。

看護師、ケアマネージャーら施設スタッフと意見交換する加藤講師（写真奥中央）＝特別養護老人ホームやまゆり苑（出雲市）

終末期「意思決定」の支援探る
高齢者、施設スタッフとの「対話の時間」を大切に

早速調査に着手したテーマは、祖母も経験した胃ろうの代理意思決定。調査地は県内7つの高齢者入所施設。認知症や脳出血後遺症が進んで口から食事をとれなくなり、入所後に胃ろう造設手術を受けた高齢者のうち、代理意思決定した家族18人を対象に聞き取り調査を行いました。まとめた論文は、2014年度の日本老年看護学会研究論文奨励賞を受賞。代理意思決定プロセスが、食べることへの危機感を実感▽自分に内在する思いとの対話▽代理の責任を背負う精一杯の自己決定▽決定への荷おろし▽決定への後押しを求める▽命をつなぐ選択としての意思が据わる――の6段階で構成されると分析。決定後の葛藤や後悔の感情の事例も指摘し、家族に対して医療看護の専門職による支援の指針が必要、と考察しています。

現在は「終末期の意思決定」にテーマを広げて、高齢者への聞き取り、ケアスタッフとの意見交換など地域でのフィールド調査を継続。「終末期をどう迎えるかは重要な問題。意思決定にどのような支援が必要なのか、具体化に資する知見の生成を試みたい」と話しています。

看護学部（出雲キャンパス）
加藤 真紀講師
専門分野　老年看護学
研究テーマは、高齢者の意思決定。県立中央病院に看護師として4年間勤務後、「老年看護学」助手として県立大へ。2014年度日本老年看護学会研究論文奨励賞を受賞。

明日への力を蓄え 自分を創造する

松江キャンパス

MATSUE Campus http://matsuec.u-shimane.ac.jp/

多数の風せんが空高く舞い上がり、幻想的な雰囲気のフィナーレ

〈表紙関連記事〉「地域の皆さんとともに!」

大学祭「飛鳥祭」大幅リニューアル／子ども向け企画も充実

10月に2日間にわたり開催された松江キャンパス大学祭「飛鳥祭」。「地域の人たちに来てもらえる祭にしたい」と、内容を大幅リニューアル。例年以上に地域住民、とくに家族連れが数多く来場しました。

実行委員会がリニューアル提案

例年タレントの舞台がメイン企画で、来場者の大半は学生と卒業生でした。1年生14人でつくる実行委員会が6月の打ち合わせで「今まで通りでいいのか」「タレントに予算をかけ過ぎでは」と問題を提起、内容を刷新することに。

今年初めて開設した親子向けの「キッズパーク」

「テーマパークのような楽しい仕掛けを」「1日中ステージが盛り上がっている音楽フェスのような雰囲気に」「子どもからおじいさんおばあさんまで、地域の人たちがワイワイ楽しめる内容がいい」など、様々なアイデアやイメージが提案されました。

「挑戦、感謝の気持ちの大切さを学んだ」

正門付近は華やかにデコレーション、テーマパークのような雰囲気を演出しました。実行委員のアイデアで「赤+植物」のデザインにこだわったという中庭特設ステージ。ここに立ったのは芸能人ではなく地元の音楽バンド。2日間で計14ものグループが出演し、FM山陰出演をかけた高校生バンド甲子園、開星高校と立正大淞南高校によるマーチングパレードも。保育学科の学生による「キッズパーク」やものづくり教室など親子向けのコーナーも多く設けられました。1日ゆっくり過ごしてもらうため、食ブースの充実にもこだわりました。学生による模擬店以外に、地元飲食店の協力で7カ国の多国籍料理店を用意しました。

実行委員長の本田雛子さん(1年)は「新たな挑戦で戸惑いもありましたが、先生や地域の皆さんの支えで最高の飛鳥祭になりました。活動を通して学んだのは挑戦すること、感謝の気持ちの大切さです。この経験を大学生活の様々な場面で生かしていきたいと思います」と話していました。

フィナーレで来場者に感謝のあいさつをする実行委員たち

Research Report 研究レポート

藤原 映久准教授

児童相談所の勤務経験を生かして現場と連携「児童虐待」問題に向き合う

MATSUE Campus

児童養護施設を訪問し、スタッフと意見交換する藤原准教授

元児童相談所(児相)職員の藤原映久准教授の研究テーマは、児童虐待、社会的養護、児童間暴力。現場の職員スタッフと連携し、問題解決のための各種支援プログラム開発に力を注いでいます。

「児童虐待」全国で過去最高8万件突破

全国の児相の児童虐待への対応件数は年々増え、2014年度は過去最高を更新、初めて8万人を突破しました。県内でも児相、市町村の対応件数が計305件(重複ケース除く)に上り、前年比約56%の増。「事案の急増に常に人員が追いつかない。現況を分析研究し、対応法もじっくり学びたい。でもそんな余裕がないというのが現場の状況」。自身も児童心理司、児童福祉司として15年間身を置いた児相の現場は、常に使命感と焦燥感が交錯していたと言います。

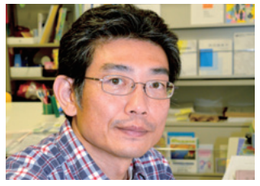
「子どもの保護が主な目的の児相でも、親を含めた家庭への支援も求められ、全ての要求に対応するには限界が来ている。児相は専門的対応を要する案件の対応に追われており、業務の分担とともに、地域ごとの現状に応じた解決策が求められている」と指摘。現場で抱いた思いが、研究職を志すきっかけになりました。

松江キャンパス公開講座で講義する藤原准教授

一貫して現場主義「いま」の課題に取り組む

よって研究スタンスは一貫して現場主義。児相や児童養護施設のスタッフと意見交換しながら、「現在」の課題について調査・研究。職員向けの「島根県版アセスメント研修プログラム」など児相時代に関わった各種プログラムについての活用検証・改善を含め、現場や子育て支援のためのプログラム開発に取り組んできました。また、大学の公開講座にも注力。今年度は子育て支援プログラムを活用し、児童養護施設や保育所、里親など養護・保育従事者を対象にしたスキルアップ講座を行いました。

現在取り組むのは、児童養護施設などに措置入所した要保護児童への対策。児童間暴力など施設内暴力が全国的に問題化しており、「虐待から守るための入所が、暴力被害を受ける場になってしまっては本末転倒。虐待によるダメージからの回復には、安心・安全な生活環境の構築が不可欠」と強調。「『大事に思ってくれる所がある』と思ってもらえる場所にしなくては」と、現場スタッフと共に、子どもたちが安心して暮らせるための方策を探っています。



短期大学部保育学科(松江キャンパス)
藤原 映久准教授

専門分野　児童家庭福祉、社会福祉
社会福祉概論、児童家庭福祉、保育実習、社会的養護などの科目を担当。日本子ども虐待防止学会など所属。児童虐待、社会的養護、児童間暴力などの問題に取り組む。

学生活動紹介

do ing

[ドゥーイング]

キャンパスから地域へ！

学内にとどまらず、地域で活動の場を広げている県大生。各キャンパスの特色を生かし、課外活動として地域の方々と積極的に交流しています。各キャンパスを拠点に、学内外で活躍する学生に、活動に至るきっかけや活動内容について話を聞きました。

石見神楽サークル「舞濱社中」初の主催公演を開催しました。

浜田キャンパス 舞濱社中代表 小瀧 真由さん（総合政策学部2年）

石見神楽サークル「舞濱社中」は結成3年目の今年、初めての主催公演「学生神楽祭～集え若者たちよ、神楽の風を吹かせよう」を大学内で開催しました。

2013年3月に発足し、現在9人が所属。私自身は「江津・嘉久志子ども神楽」出身で9歳から始めましたが、多くは大学入学後から始めた初心者です。宇野保存会（浜田市）から指導を受け、高齢者施設の慰問やイベント出演など年数回公演を行い、研鑽を積んできました。

主催公演は、普段神楽に馴染みのない若者にも神楽の魅力を知ってもらいたいという思いがありました。そのため浜田、江津市の高校3校の神楽団体にも出演してもらい、演者は総勢約90人。石見智翠館高校には吹奏楽と神楽の舞の融合という、新しい形の神楽を披露してもらいました。

サークルメンバー9名

200人もの観客に来ていただきましたが、学生が少なかったのは残念でした。メンバーを増やし、公演の数も増やしていくことを今後の目標にしたいと思います。

大学祭「海遊祭」で『塵輪』を上演する舞濱社中

初の主催公演「学生神楽祭」

「布遊」の指導で創作に取り組む「布絵本サークル」のメンバー

ハンセン病療養所研修に参加した県立大学看護学部学生など県内の看護学生たち

島根県主催のハンセン病療養所研修に参加 長島愛生園（岡山県）を訪問

出雲キャンパス 看護学部4人

研修に参加した、左から佐藤美咲さん（2年）、山口由香さん（2年）、中田穂奈美さん（2年）、石倉学さん（1年）

この夏県内の看護学生対象のハンセン病療養所研修（県主催）に参加した4人。長島愛生園（岡山県）を1泊2日で訪問し、ハンセン病について理解を深めました。

2年連続参加の佐藤さんは小学生の時から同園を訪問したり、文通などで入所者と交流を続けています。「再会する度、講演で各地を回るなど精力的に活動されている姿を拝見し、自分には何ができるかといつも考えます。交流を続け、ハンセン病の歴史や入所者への理解を深めるための活動に取り組んでいきたいと考えています」

山口さんも昨年に続き2回目の参加。「かつては医療者も患者に近付かず、居住地も分けられていたと聞きました。患者を守り、自らを守るためあらゆる病気に対し、正しい知識が必要だと改めて感じました」

初参加の中田さんは、「罹患した親と別れたくないと、共に入所した子どものための宿舎・小学校の存在を初めて知りました。実際にそのケースで園に来たという90代女性のお話を聞くことができ、貴重な経験でした」

石倉さんも初参加。「平成になってもホテル宿泊を拒否された事例に衝撃を受けました。偏見がなくなってきたとの指摘もありますが、むしろ関心が薄れ、偏見は根深く残っています。佐藤さんの活動のように、交流を続け関心を持ち続けることの重要さを感じます」

手作り布絵本の温かさを地域の子どもたちに届けたい。

松江キャンパス「布絵本サークル」部長 村口 麻由さん（総合文化学科2年）

バリアフリー絵本とも呼ばれる「布絵本」作りに取り組んでいるサークルです。ゼミで読み聞かせをしている学生や本好きの1、2年生10人が、4月に結成しました。

フェルトなどの布を材料に作る布絵本は、ぬいぐるみ感覚で触れて遊ぶことができ、赤ちゃんやハンディキャップがある子どもも楽しめます。ボタンやファスナーを使った立体的な作りで、文章がないので自由にストーリーが創作できるほか、遊びながらファスナーの開閉やボタンの留め方を覚えられる〝知育効果〟もあるそうです。

古志原公民館を拠点に布絵本制作や読み聞かせをされている「布遊」との出会いが結成のきっかけ。週2回集まり、「布遊」の北原礼子さん、若槻秋子さんの指導を受けながら創作を続けています。1つの作品を仕上げるのに数カ月もかかり、なかなか数は揃いませんが、学内の絵本専門図書館・おはなしレストランライブラリーで見てもらったり、読み聞かせにも活用し、手作り布絵本の温かさを地域の子どもたちに届けていきたいと思います。

「布絵本サークル」のメンバー

OB・OG活躍紹介

Glocal

Global & Local

夢いだいて、キャンパスから世界に、地域に。

グローカルに活躍する県大OB・OGたち

松江キャンパス

栄養士の資格生かし 地域の健康づくりに熱い思い

高齢者施設で栄養士と面会する門脇さん

「地元で食に携わる仕事に就きたい」と開星高校調理科から短期大学部健康栄養学科へ。在学中は「栄養士になって病院に勤務する」と漠然と将来をイメージしていたという。

転機は就職活動。栄養士資格が条件の大手食品会社の営業職に興味をもった。医療、福祉施設を回り、高齢者や病人向けの流動食、サポート食品を紹介するのが仕事。大学では乳児から高齢者までのライフステージを学んだが、中でも高齢者の食、健康管理に目が向いた。「学んだことが生かせる」と選んだ職場だ。

米子市から浜田市まで100を超す病院、施設を担当。商品の売り込み、情報提供だけでなく、現場の栄養士や看護師、言語聴覚士などリハビリテーション専門職らと連携して栄養管理も考える。高齢県の島根、機能性食品のニーズの高さも実感する。「先輩方から学ぶことばかり。地域の人たちの健康に関わることができ、日々充実しています」。後輩たちには「栄養士の仕事は多様。可能性を狭めず、チャレンジしてほしい」と期待する。

健康栄養学科 2011年3月卒

門脇つばささん（24歳）

松江市出身。株式会社明治中四国支社山陰オフィス（米子市）栄養営業部栄養三課に所属。3年間の実務経験を経て、2014年5月、管理栄養士の資格を取得した。

浜田キャンパス

総合政策学部 2005年3月卒

堂原 亮さん（32歳）

江津市出身。浜田キャンパス2期生。民間企業から浜田市職員に転職し5年目。定住対策課を経て、農林振興課で林業を担当し3年になる。

民間企業に就職したが「地域行政に関わりたい」と浜田市職員に転職。現在は農林振興課で林業を担当する。補助金に頼らない「儲かる林業」の実現に向け奔走する毎日。「難しい課題だが、やりがいがある」と話す。地域への思いは大学で所属したボランティアサークルで高まった。祭りで神輿を担ぎ、後継者がいない農家で米作りを手伝った。「人とのつながりの大切さを知った。経験は財産。勉強も遊びも一生懸命頑張って」と後輩にエールを送る。

出雲キャンパス

県立看護短期大学　1998年3月卒

田儀 純子さん（38歳）

出雲市出身。前身の県立看護短期大学1期生。県立中央病院、県立湖陵病院を経て移転新設した県立こころの医療センターへ。現在リハビリII病棟主任看護師。

看護師の母を見て育ち、保育園時から夢は「看護婦さん」。卒業後、県立の一般病院に勤務したが3年後精神科に移り、以来14年一貫して精神科。「心に向き合う仕事にやりがいを感じます」。今夏、母校で2カ月間の臨床指導者養成研修を受講。「教わることで気づくことも多かった。貴重な経験」。学生時代は時間をやりくりしてバイトも経験。後輩には「課程は過密だが、学校外、地域で幅広い年齢層と接することも将来役に立つはず」とアドバイスする。

島根県立大学未来ゆめ基金へのご協力に心よりお礼申し上げます。

『島根県立大学未来ゆめ基金』につきまして、平成27年5月1日から平成27年10月31日までの間に、下記のとおり個人21名、法人・団体等38名の皆様から総額700,410円のご寄附をいただきました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を掲載させていただきます。

【個人からのご寄附】

家本　賢	岩本　要二	竹内　俊勝
石原　祥樹	岡崎　巧	中間　祐吉
石見　治彦	壽山　道徳	松岡　紘一

【法人・団体等からのご寄附】

出雲ロイヤルホテル	株式会社メリット
御料理仕出し処さとう	協同組合浜田スタンプ会
株式会社伊原組	公立学校共済組合松江宿泊所
株式会社今井書店	島根トヨタ自動車株式会社浜田店
株式会社浦辺設計	松栄印刷有限会社
株式会社えすみ	東京反訳株式会社
株式会社大川清風堂	浜崎タイプ販売有限会社
株式会社コニシ	ホクサン厨機株式会社
株式会社ダスキンまつえ	北陽警備保障株式会社
株式会社トヨタレンタリース島根	ホテル宍道湖
株式会社中村組	まるなか建設株式会社
株式会社はらぶん	有限会社上幹総業
株式会社プロビズモ	有限会社シマケン内装
株式会社松文オフテック	有限会社東洋ユニフォームセンター
株式会社御船組	有限会社友田大洋堂

※五十音順、敬称略
※ご寄附をいただいた皆様の中で、御芳名の公開を希望されない方につきましては掲載しておりません。
※申込書は本学ホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますのでお問い合わせください。

事務局財務課　TEL:0855-24-2218

申込パンフレット

PRESENT

ご意見・ご感想をいただいた皆様の中から抽選で、島根県産「つや姫」5kgを5名様にプレゼントします。ご意見は、本誌差込ハガキ、または、メールにてお寄せください。

※当選者のお知らせは発送をもってかえさせていただきます。
※応募締切／平成28年4月20日必着

■メールでの投稿はこちら
島根県立大学 広報誌オロリン事務局
E-mail: kikaku@admin.u-shimane.ac.jp

編集後記

オロリン第5号を手にとっていただき誠にありがとうございます。今号の特集では、島根県立大学の特徴的な教育の取り組みをご紹介しました。3つのキャンパスがそれぞれの特徴や専門性を活かしながら日々の教育活動を行っている様子がお伝えできたのではないかと思います。
広報誌に関するご意見、ご感想をお待ちしております。「オロリンvol.6」は6月発刊予定です。どうぞお楽しみに!